

二〇一九年一月二五日(参加者一七名)

恵方へと火柱倒す大とんど うつき
 猛る火にとんど守らの鬨の声 うつき
 とんど灰天上界を目ざしけり うつき
 百幹の竹蔓で結ひとんど焼 うつき
 燃ゆる火に感謝の札やどんど焼 こすもす
 ついと向き変へたる鯉の淑気かな こすもす
 どんどに手かぎせば誰もみな笑顔 こすもす
 飾焚くお祝箸も三方も こすもす
 鯉の餌を横取りせんと鴨の嘴 せいじ
 注連焚きて茶筒に灰を貰ひけり せいじ
 鳥声降る社の杜や水温む せいじ
 竹爆ぜて女人のけぞるとんどかな せいじ
 耕運機轍のあとに霜幾重 小袖
 とんど火に灰の高舞ふめでたきよ 小袖
 耳栓の子等へとんどの爆ぜやまず 小袖
 お神楽の始まりいよどんど燃ゆ たか子
 風なきと思へど猛る大とんど たか子
 注連焚ひて屑持ち帰る暮らしぶり たか子
 左義長の灰吾が肩に触れにけり なおこ
 竹爆ぜて吾を一喝すとんどかな なおこ
 まつ直ぐに立ちてめでたしとんどの火 なおこ

福男駈け抜けし道清々し 満天
 寒日和鳩らも集ふ遥拝所 満天
 御手洗の寒九の水をふふみけり 満天
 入れ代はりたち代はり来て飾焚く わかば
 対岸の鳥影を超ゆ浜とんど わかば
 とんど果て振舞酒に和みけり わかば
 健願ひとんどの煙頭に肩に 菜々
 初詣福火ほこほこ頬へ手へ 菜々
 注連縄を輪投げのごとく火の中へ 宏虎
 句輩甘酒茶屋に推敲す 宏虎
 大とんど倒せし方が恵方かな よう子
 丈余超すとんど櫓の火は天へ よう子
 寒空へ踏んまへ立ちし四脚門 はく子
 紙袋ごと放り投げ飾焚く ぽんこ
 冬晴に金堂鴟尾の跳ねに跳ね もとこ
 野球少年紅顔こがすとんどかな 有香
 ほめられて年に似合はぬセータ買ふ よし子

定例会会みのる選

二〇一九年一月二五日(参加者一七名)